

# 使徒行伝における聖霊理解

雨 貝 行 磨

## I はじめに

《聖霊 πνεῦμα ἁγίου Der Heilige Geist》とは何であるか、いわゆる聖霊論については、古代教会以来、一実体三位格 *una substantia, tres personae* の第三位格 *persona* として信条に明確な規定を与えられ、端的に十字架と復活による救済の力として教団に働く神として告白された。

しかし、明確な信条における告白も、教会史のなかで十分に保証されつづけたとはいわれない。すなわち、宗教改革以後、《聖霊》は、例えば、Melancthon においては、救済の秩序における救済の根底 *Ursache* と理解された。その後 Seb. Frank, J. Böhme など、いわゆる神秘思想的傾向 *unio mystica* に影響された Pietismus は悔改めと救済において、《聖霊》よりもむしろ《聖霊の哭》Gal 5:22 にその理解の基調をおいた。更に、象徴的、経験的、神秘的傾向は、イエス・キリストの倫理的な理解とともに、聖霊を合理的 *vernunftlich* なわくを超越したものであることにその学的努力がかたむけられたが、ここで、ドイツ・イデアリスムスの方向と内容とに深く規定されて、神学的努力の固有な対象であることを喪失されはじめた。Schleiermacher 以後、神学的思索を新しくして、その固有な領域と共に回復しつつも、《聖霊》をキリスト者の、神との交わりという特殊な前提からキリストによってたてられた総体の共同の霊と理解した。A. Ritschl では《聖霊》を《神の本質から発出した教団の倫理的自己規定》、E. Troeltsch は、個人の無媒介的な宗教的生産性》として理解し、ついに《聖霊》概念は三一論における第三位格としての意義および教会論における位置を失ったのである。

第1次大戦後、いわゆる弁証法神学は、啓示としてのイエス・キリストの出来事を提示し、その救済のわざを教団において、すなわち、キリストのからだ *corpus Christi* において示し、その肢体としての個々人に現実化するものこそ《聖霊》であることを示した。R. Bullmann においては、《無規定性からの新しい自己理解の超越的契機》としての自由、E. Brunner では、《現存の秩序内における隣人との出会いにおいて賜物と同時に課題 *Gabe und Auf-*

gabe となる神の意志」と理解されるのである。従って、神の救済の計画 promissio における、教団の宗教 missio の自覚という歴史と宣教というオイクメネにおいてである。宣教論の課題であり同時に教会論の内容なのであるといえよう。<sup>(1)</sup>

以上、《聖霊》をめぐっていわば教会史に対する組織神学的素帋をえたわけであるが、ここで宗教改革以後の Protestantism が、とりわけ、ドイツ・イデアリスムスを経過するなかで、オイクメネを失うことをみた。しかし《聖霊》とは、神の歴史支配を、教団を媒介として貫徹すること、オイクメネとの関わりにあることの 積義的妥当性を使徒行伝においてさぐりたいと思う。

## II 使徒行伝

使徒行伝 Die Apostelgeschichte は、キリスト教宣教が、エルサレムからローマへと展開することを時間的経過にもとづいて叙述した文書ではない。むしろ多様な各地の原始教団が、終末遅延の認識と現実的な体験とによって、その新しい歴史像を要請し、そこで教団がみずからに課せられた現実的経験を透視する認識を獲得しつつ生産した神の歴史の解釈史 Auslegungsgeschichte であり、史的 historisch なあるいは史的叙述 Geschichtschreibung ではない。<sup>(2)</sup>

エルサレムはローマによって蹂躪され、しかもなお、神の歴史支配がイスラエルにおいてその支点をもつことを告白するとき、オイクメネはもはや、《終わりの時》《残される者》において成就する歴史の完成、審判においてではなく、《教団の時》《すべての民》での現実的体験において神の歴史支配を証言することであり、使徒行伝はこの主の聖霊証言であったとみてよい。

使徒行伝では、《聖霊》とその働きについて語るのは58回、マルコ6回、マタイ11回（ルカ17回）と比較して、いかにその頻度の著しいかがわかる。《聖霊伝伝》といわれるゆえんである。<sup>(3)</sup> しかし、その頻度を算術的に計量しても、ただちにその特質は把握できないとはいえない。そのテキスト批判をなし、その思想的構造をさぐらねばなにもいえない。

(1) 清水義樹：プロテスタントの神学Ⅱ 1963 283 ページ

(2) H: Conzelmann: Die Mitte der Zeit, Studien zur Theologie des Lukas 1962 邦訳 230 ページの結論、なおそこで注とされたもの「ルカは霊が『救済史の継続と神学の推進力である』」E: Käsemann: R. G. G.<sup>3</sup> II bes. S. 1277.

(3) 山谷省吾：新約聖書解題 1947.

さて、《聖霊 *πνεῦμα ἁγίου*》および《霊 *πνῦμα*》は1章～15章に集中的であり、<sup>(4)</sup>又この箇所は、ルカの編集史的な自覚にもとづいて、かなり初源的な伝承にふれることが可能なのである。このなかで、かなりまとまった伝承を背景とするテキストをてがかりに、考察してみたい。

### Ⅲ テキスト批判

ルカは、使徒行伝を編集し作成にあたってかなり明瞭な自覚を示している。

1:8 聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。

これは、終末の遅延（1:7 時期や場合は……あなたがたの知る限りではない）が、使徒行伝の背景であり、そこで、ルカは《聖霊》《力 *δύναμις*》と《証言 *μάρτυρια*》とを結ぶ。

Lk 24:48 あなたがたは、これらのことの証人 *μάρτυρες*（キリストの十字架と復活の）である。見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられる *ἐνζύσηθε ἐξ ὕψους δύναμιν* まで、あなたがたは都にとどまっていなさい。

これは、ほとんど行伝4:33にくりかえされるモチーフでもある。すなわち力づよくあかしをする *δύναμις μεγάλη ἀπεδίδουν τὸ μαρτύριον* この内容は《主イエスの復活》である。この力 *δύναμις* は、ルカにおいては、しばしば聖霊と共に用いられる Lk 1:17, 4:14, 行伝 1:8, 8:19, 10:38, 2:33, 5:32では、復活の証言から、教団の *missio* を基礎づける。

1) 6章～7章全体にわたるステパノ伝承について。ステパノの宣教におい

(4) C. C. Torrey: *The Consposition and Date of Acts* 1916 において1章～15章にわたってパレスチナ・アラム語で書かれた資料文書の翻訳である、との仮説がたてられている。確かに、これらの箇所多くにセム語的文體の特徴がみられるがだからといって、この箇所の統一性を証明することにはならない。E. Trocmé: *Le Livre des actes et L'histoire* 1957 邦訳 250 ページ以下

ては、ルカはほとんどこの初源的な伝承資料を用いていることは確かである。この伝承を用いることによって、ステパノ自身がユダヤの伝統に根拠づけられていることを示す。<sup>(5)</sup>

ルカはここで、その編集句においてその思索の特徴を示す。

6 : 2 そこで、12使徒は弟子全体を呼び集めて言った *προσκαλεσάμενοι … εἶπαν* 7 : 59 こうして、彼らがステパノに石を投げつけている間、ステパノは祈りつけて言った *ἐπικαλούμενον καὶ λέγοντα*

*εἶπαν* は7 : 2にも示されるようにルカがその宣教の形式をますものであり、*γεγειν* はその第2アオリストである。<sup>(6)</sup>*προσκαλεσάμενοι* は2 : 39に引用として用いられているし又 *ἐπικαλούμενον* は2 : 21にあり、これら共にすでに宣教用語として元来終末論的な意味であったものを教会論的な召命にまで変えているのである。<sup>(7)</sup> 又《使徒》の用語は、《12人》が《使徒》と呼ばれて時代を反映し、史的には、この編集が使徒後時代と推定するひとつの根拠となる。<sup>(8)</sup> このテキストで特徴的なことは又次のようである。

6 : 3, 御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たち *μαρτυρουμένους ἑπτὰ πύργους πνεύματος καὶ σοφίας*

6 : 8 ステパノは恵みと力とに満ちて *πλήρης χάριτος δυνάμει*

7 : 55 彼は聖霊に満たされて *δπάρχων δὲ πλήρης πνεύματος ἁγίου*

これらは2 : 4, 4 : 8, 31 (6 : 10), 13 ; 51において示され、つねに宣教と派遣とに結びつけられている。*δπάρχω* は、新約において60回、なかでもルカ、行伝に40回用いられるきわめてルカの用語である。

さて、このステパノのユダヤ教旧約予言における関わりと、その受難の形式は、イエスの十字架の受難と接点として、パウロの宣教と結びつく。すなわち、13章のパウロの宣教である。パウロの宣教のなかでルカは、イスラエルにおける神の救済の計画を語り、モーセもエリヤも救済史の過去の時期にはめこみ、彼らを洗礼者ヨハネと同列にあつかってエリヤの終末論的性格を

(5) トロクメ前掲書 p. 321.

(6) Bl.Pehr §101, 420 では、これが区別されるべきことを示す。(Lk. 12:16, 20-2).

(7) *ibid* 317 ページ

(8) 真山光弥：使徒行伝における異邦人伝道 金城学院大学論集 1970, 41 ページ

(9) コンツェルマン：*ibid* (1) 278, Anm 8.

消去する。<sup>(9)</sup>

これに対するユダヤ人の抵抗がなされる (7:54, 55, 13:45, 46)。ここでは、アンテオケ教団の指導者たちを宣教に派遣するのはまさしく、聖霊の任命によるものである。このテキストは、《聖霊が……告げる *εἶπεν τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον*》と《聖霊》を主体化する。<sup>(10)</sup> 10:19, 11:12 にある派遣への任命である。20:23, 21:18, 28:25 はいづれも、主体化されたルカの編集句とみてよい。まさに神の計画 *promission* にもとにある *missio* である。編集句として 13:9, 52 がある。

ここでルカは、その神学にもとづいて、聖霊による教団における任命、宣教への派遣として、その形態の類型化を試みようとしているのではあるまいか。

2) 次にサマリヤ伝道の問題である。サマリヤの町が史的にどこにあるのかは不明である。<sup>(11)</sup> マルコは、イエスの活動の範囲としてサマリヤにはふれない (Mk 3:7, 8)。ヨハネにおいてはすべて、サマリヤ伝道をイエスの活動にさかのぼらせ、その普遍的な救済史の必然性にまで明瞭に位置づけている (4:4 *ἕδρα*)。ルカ、行伝についてはどうか。すでに 1:8 においてサマリヤ伝道を明確に自覚する。すなわち、マルコに示されるようにイエスはサマリヤでその活動をしなかった。従って教団は、サマリヤにその宣教活動をしなければならないのである。<sup>(12)</sup> 水による洗礼がなされ、《聖霊、霊》と結び、《イエスの名》によってなされる。しかも、マタイのみが記録する (28:19) 《父と子と聖霊の名による》洗礼をしらない。この伝承において特徴的なことは、8:15, 16, 17, 18, 19 において《聖霊……受ける *λαμβάνειν*》である。ステパノ伝承にみられるものと異なる。サマリヤ伝道のモチーフのある伝承とそれを生みだした教団があったことを予想させる。しかも、これをルカは聖霊による教団の宣教物語につくりかえている。

3) カイザリヤ伝道の問題について<sup>(13)</sup> (9章31節~11章18節)。この部分は3つの物語から成立しているが、ルカは前二者の物語よりも、コルネリオの悔改めにその重心をおいていた。ここでコルネリオの回宗 — 異邦人伝道が

(9) Bauernfeind: Die Apostelgeschichte Theol. Hand Kommentar NT. S. 169

(10) *ibid* SS. 122-123.

(12) コンツェルマン *ibid* 邦訳 329 ページ, Am 10.

(13) トロクメ; *ibid* 邦訳 258 ページ

いかに語られているか。

10:35 神は………神を敬い *φοβούμενος* 義を行う者はどの国民でも受け入れられる *καταλαμβάνομαι*

ここで、《神を敬うもの *φοβούμενος* とは13:16, 26にイスラエルの民、アブラハムの子孫》と並置され 《信心深い *εὐσέβεια*》(10:3, 7) 《神を敬う *τεβόμενος*》(13:43, 50, 16:14, 17:4, 17, 18:7) と等しく、異邦人でユダヤ人と共にその会堂に集っていたものであるが、ユダヤ教の律法の要求には応じない者のことである。

ペテロとコルネリオとその家族とが出会い、イエスの名による罪のゆるしの証言(10:43) 悔改め(11:18) がなされ、聖霊の来臨 10:44, 11:15 (*ἐπιπίσω*) 御霊による派遣 11:12 (*εἶπεν*) がなされ、その時割礼を受けている信者》10:45, 《割礼を重んじる者》11:3は沈黙せざるをえない。いまや新しい事態が生起したのである。

#### IV ま と め

聖霊論は、古代教会以来、三一論との関わりで論ぜられたが、更にさかのぼって、原始教団においては、決定的な終末遅延による現実的体験のなかで蓄積された初の歴史支配に対する信仰告白であるといわねばならない。しかも、それを教団の宣教、派遣というオイクメネにおいて理解されねばならず、決して個人的、内面的な、神秘的領域においておしこめてはならない。神が歴史を主宰するという信仰告白の原理を貫徹すべく最も柔軟に生きた教団が、《聖霊》による証言と洗礼において自己を表現した。これが、原始諸教団の生活の座において認識されたのである。

## Democratization in Private School Law of Japan

Norikatsu SASAGAWA

The subject treats the relation between the "Rijikai" and the "Hyogiinkai". In Private School Law the Rijikai has the power of the legislative and the administrative as principle, and the Hyogiinkai is only an advisory organ. In order to democratize the educational organization of the private school we must separate the legislative and the administrative and give the former to the Hyogiinkai and the latter to the Rijikai.

## Der $\pi\nu\epsilon\delta\mu\alpha$ Begriff in der Apostelgeschichte

Yukimaro AMAGAI

In der Dogmengeschichte können wir oft gelten diesen Begriff als die persönlichen, innerlichen Erfahrung. Aber in der Apostelgeschichte hatte das  $\pi\nu\epsilon\delta\mu\alpha$  mit der Verkündigung und der Taufe zusammengebunden worden Das Verspätung-Bewußtsein auf das Eschaton bildete die Auslegungsgeschichte in der Lukas-Urgemeinde aus. Wir können diese Konstruktion dieses Gedankens in Jeden Kapital 1-15 betrachten.

Stephanus, der Märtyrer-Überlieferung

Samaria-Mission

und

die Bekehrung und Taufe des heidnischen Hauptmanns Kornelius.